

文科學術談話會會誌 第二十三號

文科に對する希望

湯原校長

本校には、文科理科家事科の三科に分れて、その中にいづれが重い軽いといふ事は出来ないが、しかし、思想問題に關係のあるのは、云ふまでもなく文科である。近來輿論もやかましく批難するやうに、社會の趨勢はやゝ物質偏重の傾があるのは事實である。これは、社會の生活狀態の變遷に俱つて免れ難い事であるけれど、このまゝ打ち棄ておけば、ゆゑしき大事にならぬとも限らぬ。

西洋諸國の狀態を一面から觀れば、近世科學の進歩と共に、如何にも、金即ち力といふ狀態を呈して、その進歩は主として物質方面に表れてをるやうに思はれるけれど、それにも關らず人心はいかにも健實な處がある。信義を重じ、且一旦事があれば、上の命令を待たずして奉公の至誠を捧げるといふ事は、今回の大戰に當つて、よく著くあらはれ、證明された事實である。これは畢章物質的方面と同時に精神的方面の教育を怠らなかつた結果此處に致つたのである。元來科學といふものは、一つの思想の發現に外ならない。科學其のもの應用を觀ば、指先の仕事のやうに、或は機械の働きによつて成功するやうに見えるけれど、その本をなしてゐる者は、やはり思想である。しかも靜玄にして深奥なる思想である。それ故に、その本に於てやはり一

次 目

- 文科會に對する希望
- 獨創的精神の保姆地
- 倭繪につきて (續き)
- 舊 師
- 殖民地に於ける國語教育
- デモクラシー及び二三の問題について
- 私の解するデモクラシー
- 學生平和會議
- ひかり
- 我等をして
- 實盛塚
- 野のみち
- 花
- 會員諸君へ
- 編輯室より
- 會計報告

湯原校長
内ヶ崎先生
下村三四吉先生
尾上柴舟先生